

飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別陳列『飛鳥の王陵』 飛鳥の代表的な古墳については、江戸幕府、奈良奉行所などによって王陵治定のための調査が行われた。調査は元禄、享保、安政、文久年間のほか、明治になってからも行われた。展示は、これら王陵治定の変遷を絵画資料、調査記録等によって構成した。とくに、天武・持統陵については、文暦2年(1235)の盗掘事件の実検記である「阿不幾乃山陵記」(重要文化財)を展示した。これは従来から研究者が注目していた文書であったが、当館で初公開する機会に恵まれた。

特別展示『高松塚拾年』 高松塚古墳の壁画発見以来10年間、壁画を保存するために文化庁が実施してきた保存事業の紹介とその成果を展示した。

昭和47年、奈良県明日香村の小古墳で極彩色の壁画が発見された。ただちに調査主体の明日香村、橿原考古学研究所の意向を受け、文化庁は「高松塚古墳応急保存対策調査会」と「高松塚古墳総合学術調査会」を結成した。この両調査会の検討を経て、応急処置と絵画調査を進める一方、関連する諸科学者によって調査と保存方策が講じられた。この結果、諸外国の壁画の保存状況を参考にして、壁画は現状のままに保存し、公開しないことが基本となった。

壁画は脆弱な状況であったため、調査修復の時、石室内に入るための保存施設を作る必要があった。そのため、施設の範囲の発掘調査を行い、墳丘の構造についての知見を得た。この施設の完成を待って、アクリル系樹脂で塗喰の剥落を防止した。展示では、壁画保存事業のほか、壁画の重要性に鑑みて実施された前田青郎門下による模写、出土品の同一素材によるレプリカの制作、木棺の現状復原、出土人骨の保存施設の建設、さらに、飛鳥保存財団による高松塚壁画館の建設や建設省による飛鳥園宮公園の高松塚地区の公園化などの一連の事業もあわせて紹介した。なかでも、壁画保存施設も含めた墳丘断面模型(1/20)と壁画修復状況を再現したジオラマ(実大)は好評を博した。

(猪熊兼勝・小林謙一)

阿不幾乃山陵記